

# LIBRARY NEWS 図書館ニュース

Vol. 33, No. 2 (2005. 1)

## 図書館という空間に出会う

河添房江

ちくま新書の最新刊の井上真琴『図書館に訊け!』には、最初に「図書館つかいこなし心得の条」の五箇条が出てきます。その第一条には、「まずベースキャンプとなる図書館を決める。やたらいろいろ図書館に行くよりも、ベースキャンプとなる図書館をひとつ決めて、使い込むことが先決だ。これをホームライブラリーと呼ぼう。ホームライブラリーは、皆さんが学生なら、大学のキャンパス内にあるはずだ。」とあります。まったく尤もな意見ですが、ホームライブラリーは決めるものというより、いくつかの図書館を利用する中でおのずと定まってくるものなのです。

ここで恥ずかしながら、私の30余年にわたるホームライブラリー歴の一端を告白しますと、最初に図書館に嵌ったのは高校生時代、その頃のホームライブラリーは、渋谷区立中央図書館でした。原宿の竹下通りをしばらく行き、一つ左に入ると、嘘のよ

うに閑静となり見えてくる四階建ての建物で、下校後や日曜日も足繁く通ったものです。続いて大学や大学院時代に最もお世話になったホームライブラリーは、広尾の都立中央図書館。とくに博士課程の三年

間は、関西の西宮市に住みながら、東京の大学院に新幹線通学をするという荒技をしていたので、毎週木曜日の朝ともなると上京して、すぐに都立中央図書館に駆け込みます。そこで、とにかく参考になりそうな文献のコピーを受付の締切りの午後6時(他の図書館に比べて破格に遅かった)までに山と頼み、さらに閉館の午後8時までねばって、文献に目を通していました。



### 目次

図書館という空間に出会う(河添房江).....	1
西洋美術史の文献探索についての雑感(秋山聡).....	3
学び-いま・むかし-:『庭訓往来』の魅力の一端(丹和浩).....	5
平成16年度資料展示会・講演会報告.....	7
ECR: 電子的授業支援サービスをご活用ください.....	10
お知らせコーナー.....	11
こんなとき、お待ちしています! ~サービスカウンターの使い分け~.....	12

今にして思うと、ホームライブラリーとなった図書館は、開館して間もない所ばかりで、最新の設備と充実した蔵書数を誇るどころばかりでした。もし皆さんが大学図書館のほかに準ホームライブラリーを持ちたいと思うならば、近くの公立図書館で、できるだけ蔵書数が多く、かつ最近できたところが狙い目といえるでしょう。

都立中央図書館には、今でも年に数回は行くことにしています。それは専門のことを調査するより、異領域の最新の文献をチェックするためです。私は『源氏物語』を中心とした日本古典文学が専門ですが、歴史学や美術史、社会学などの最新刊が並んだ棚も、定期的に見て回ります。

現在の図書館は電子化が進んでいますから、皆さんも利用する際は、まずOPACで蔵書を確認してから、来館されることも多いでしょう。しかし、必要最小限の文献をコピーするだけなら、ネット上でも受付けていますから、必ずしも図書館に行く必要性はないこととなります。実際、図書館ニュースにあるように、蔵書検索のみならず、文献複写や図書の予約の依頼など図書館に足を踏み入れずに可能になりました。本学に限らず、今日の大学の附属図書館は、押しなべて電子図書館としての機能を拡大・充実する方向にあるようです。

とはいえ問題は、こうした機能を利用して、効率よく手に入れた文献だけが、人間の想像力を刺激してくれるわけではないということです。図書館の空間に赴き、思いもかけない異種の本に出会い、また人に出会うということもあります。それもまた図書館の重要な機能なのです。2002年に完成した国立国会図書館の関西館が、当初、非来館型、発信型の電子図書館になるといわれたのに、蓋を開けてみると、来館型の図書館と電子図書館の共存形態であったことも、その点と関わることもかもしれません。

現在の図書館そのものが、電子図書館に取って代われ、アーカイブ(保存庫)化していくと予想する向きもありますが、それはどうでしょうか。たしかに現在の図書館、あるいは博物館・美術館が、ある程度はアーカイブ化していくことは避けられない事態かもしれません。しかし専門書や一般書すべての資料を電子化することが可能で、電

子図書館だけで十分機能していける体制が整ったにせよ、それで良いのかはまた別の問題なのです。それは本が配置された図書館のもつ付加価値の問題です。つまり、探しにきた本と別の本と出会うことによって、知りうる情報や喚起されるイメージを私たちが手放してよいものかどうか、という点です。必要な情報ばかりでなく、プラスアルファの情報やイメージとの出会いが、いかに私たちに創造的に働きかけるか、その作用を忘れてはならないということです。その意味で、図書館を純粋にアーカイブ化してよいかは、別に議論されなければならないでしょう。

それは、また書店とネット上の電子書店のたとえばアマゾンのような関係でもありますし、大学がeラーニングだけのバーチャル・ユニバーシティ(VU)に取って代わられないという問題と平行でもあります。大学の語源は、ギルドと同じく人が集まるという場所、という本来の意味を考えても、VUだけで大学という実空間が消滅してしまうとは到底思われません。同様に電子図書館だけが幅をきかせ、図書館が保存庫になってしまうという想像も突飛ではないでしょうか。

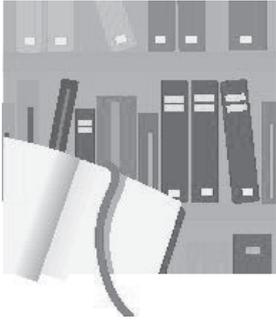
大学図書館の起源は、12世紀にできたパリ大学の中に、宮廷司祭だったソルボンが蔵書を寄付して図書館を設立し、オックスフォード大学もそれに倣って図書館を作ったのが始まりといわれています。電子化の恩恵に浴するばかりでなく、大学図書館の実空間が果たしてきた歴史的役割に、今日改めて思いを馳せてみることも大事なのではないのでしょうか。

(かわぞえ・ふさえ

日本語・日本文学研究講座教授)

参考 『図書館に訊け!(ちくま新書486)』  
井上真琴著 筑摩書房 2004.8  
所蔵：図書館1F開架 015/INO





## 西洋美術史の文献探索についての雑感

秋 山 聰

西洋美術史を専攻し始めてかれこれ20年あまりがたちましたが、その間に大きく変化したことの一つに文献検索の効率化が挙げられます。勉強を始めた頃には、自分が選択したテーマについての文献探索自体をどう組織立ててやれば良いのか皆目見当がつかず、正直なところ行き当たりばったりといったところがあったことも否定できません。そうした中でたまたま親しくなった図書館司書の方が『学術雑誌総合目録』の存在を教えて下さった時の驚きは今でもはっきりと覚えています。今でこそWebcatによって、学術雑誌はもとより単行本についても、国内の大学に所蔵されている本のあらかたは我々にも容易に検索出来るようになっていますが、学術雑誌の国内所蔵先がすぐに判明するこの目録の存在は、自分の文献探求の範囲を飛躍的に広げてくれる夢のような手段に思われたのです。ほぼ同時に西洋美術史文献についての逐次目録であるArt IndexやRIRA(後のBHAに統合)などの存在も知るようになり、ともかくも卒業論文や修士論文のための基本的文献は、積極的に他大学図書館からの文献取寄せを活用することによって、どうにか揃えることが出来ました。

しかし、勉強を進めるに連れて、新たな問題に直面することになりました。我が国にも西洋美術史についての基本的文献や主要学術雑誌は、所蔵されていはずなのですが、やはり専門性が強くなってゆくと、それだけでは足りなくなるのです。存在はわかっている、国内所蔵図書館がなく、現物はもとよりコピーすら入手が難しい文献が、だんだんと増えてきたのです。まだあの頃は海外からの文献取寄せは容易ではなく、中々にフラストレーションのたまる状況に身を置くことになりましたが、結局のところこの事態は留学するまで解決することは出来ませんでした。

私の留学先はドイツ南部のフライブルクという

小さな大学町でしたが、総合図書館のみならず各研究所図書室も充実していて、それまで手に入れることが出来ずに困っていた文献もかなり容易に接することができました。私が使っていた図書館はおよそ4つでしたが、それぞれに特徴がありました。まず総合図書館は学生だけではなく一般市民をも対象にしたもので、住民票さえあれば誰もが閲覧、貸出をすることが出来、パスポートさえ呈示すれば、旅行者でも閲覧することが可能でした。図書は開架閲覧室と開架書庫、閉架書庫および貴重書室に分けて架蔵されていました。中でも私が活用したのは開架書庫で、ここには大量の人文科学書が購入年度および購入順に並べられていました。この書棚に配列された書物の背表紙を片っ端から見て行くのが、留学中の暇つぶしの一つだったのですが、これが中々に発見が多くて、やみつきになりました。確かにデータベースの普及は、各段に文献検索の精度を高めますが、このような行き当たりばったりのアナクロな方法も悪くはないようです。検索する事項が明確な場合、データベースは素晴らしい威力を発揮しますが、往々にして頭の中をたゆたう思いつきなどによっては、たまたま目にし、手に取った書物からの発展可能性も大事なようです。私自身この方法で、これまでにいくつものヒントを得ることが出来ました。「背表紙だけを読む」ことにもそれなりの意義があるのかもしれませんが。

このほか哲学部の美術史研究所図書室、古典考古学研究所図書室、神学部のキリスト教考古学研究所図書室をよく利用しましたが、このうち後二者では、原則コピー禁止で、どうしても必要な場合は主任教授の特別な許可を必要としました。なぜコピーにそんなに厳しいのか、を一度主任教授にうかがったことがあります。本が傷むし、第一その場で読めば好いではないか、という回答を頂き、古典語はもとよりドイツ語ですらまなら

ぬ身は、ちぢみあがったものでした。以後、この二つの図書室では、必要箇所を中世修道院の写生字よろしく書写する破目になり、時に腱鞘炎とはこういう状況で罹るものかなどと思うことがありました。もう少しさばけていたのが、学生数の多い美術史研究室で、コピーの際に、書物の補修費として一回につき1マルク、もしくは1学期につき10マルク支払うことになっていました。いずれにせよ書物を大事にし、その補修を早くから前提にしている姿勢には関心させられました。

帰国して8年近くになりますが、日本においても格段に勉強がしやすくなったような気がします。国立西洋美術館、国立近代美術館、愛知県美術館、横浜美術館などの専門図書室を有する美術館の蔵書目録がネット上で検索可能になりました。また個人的には新刊書についてはドイツ書も扱っている日本アマゾン、古書に関しては専らAbebooksを使っています。以前はよくZVABを使っていたのですが、こちらは各古書店と個別交渉をする必要があり、送金方法がまちまちで時に大変手間取ることがありました。これに対してAbebooksでは全てカード決済が可能なのです。またオーストリアのSFB.atでは、AbebooksやZVABを含めて20種類ほどの古書データベースを横断検索出来ますし、探求書があれば、登録しておくことも可能なようです(実践女子大学図書館の図書・雑誌探索ページから簡単に入れます)。



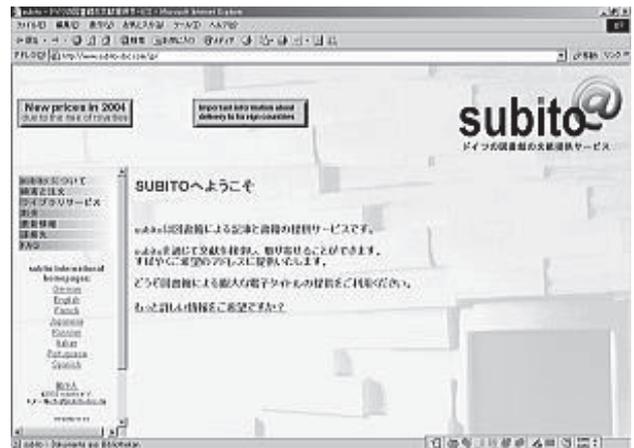
実践女子大学図書館「図書・雑誌探索ページ」

(<http://www.jissen.ac.jp/library/frame/index.htm>)

以前に比べるとあまりにも容易に、探求中の文献が見つかるのは嬉しいのですが、気のつかない

うちに出費がかさみ冷や汗をかくことがあるので注意が必要です。

そこで最近では大学図書館を積極的に活用させて頂いています。例えばドイツ版Webcatとも言うべきSubitoなどで検索して、文献の所在を確認してから、必要な論文コピーや書物の取り寄せをお願いすると、ほとんどの場合は希望がかないます。



subito - ドイツの図書館の文献提供システム -

(<http://www.subito-doc.com/jp/>)

先日も900頁ばかりの聖遺物関連の大著を「駄目もと」で請求してみたところ、数週間後には現物がミュンヘンから送りつけられてきたのには正直いって驚きました。学問研究を志す者への便宜を徹底して図るというドイツの図書館の姿勢にも、本学図書館の海外文献取り寄せについてのご努力にも頭が下がります。私自身かつては図書館を讀書と勉強(と昼寝)の場くらいにしか考えていませんでしたが、思えば勿体ないことをしたものだと思います。学生の皆さんも、是非とも司書の方々を困らせる程に(?)積極的に図書館を活用されることをお勧めします。また今年度後期には西洋美術館研究資料センターの川口雅子さんによる「アートドキュメンテーション」が開講されていますので、興味のある方は是非聴講して下さい。

(あきやま・あきら 美術・書道講座助教授)

## 『庭訓往来』の魅力の一端

丹 和 浩

『庭訓往来』は、「往来物」の中でも『商売往来』とならんで最もポピュラーなものです。概説的なことは全て事典類に譲りますが、出版された量の多さ、中世から明治初めに至るまで使用された期間の長さ、あらゆる地域、階層を超えた範囲の広さなどの点で、他の「往来物」の追随を許しません。この影響力だけを考えても、教育史的、文化史的な意義があります。

ところが、その中身について、私たちはあまりよく知らないというのが実情ではないでしょうか。今は、東洋文庫242『庭訓往来』や、岩波の新日本古典文学大系『庭訓往来・句双子』などで容易に読むことができます。しかし、読んでみてもあまり面白いものではありません。そればかりでなく、いったい何の役に立ったのか首をかしげたくなる記述がほとんどです。

たとえば、冒頭部分は、年頭の挨拶に次いで新春の遊宴に誘うことになっていますが、遊びの内容は、「楊弓・雀小弓の勝負、笠懸、流鏝、小串の会、草鹿・円物の遊、三々九の手夾み・八的等の曲節……」とあって、弓矢の勝負です。具体的に何をどのように競い合ったのかということは、注釈にかなければわかりません。おそらく、江戸時代の人々にもよく分からなかったのではないかと思います。すでに江戸時代に、『庭訓往来』の注釈や絵入りの本が数多く出されていたことが、このことを証しています。仮に、分かったところで、実生活に役に立つということは考えにくいでしょう。農家、商家の子どもたちであれば、なおさら不必要です。

冒頭部分に限らず、『庭訓往来』全体は、任国に赴任して、田畑や農民をどのように管理したらよいか、館の造作はどのようにするのか、どのような職人や商人を呼び寄せて市場をつくるのか、あるいは貴人の接待、賊徒追討、裁判の進め方、仏事の次第など、いずれも領主かそれに準ずる立場から書かれています。本来は、庶民階層には無縁なことばかりです。



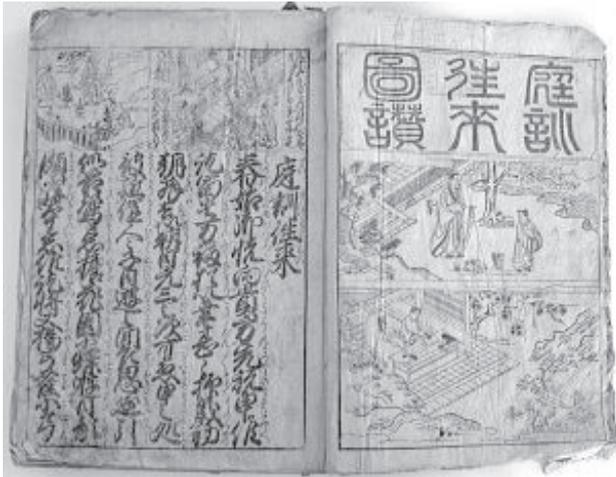
『庭訓往来絵抄』 槐亭賀全 文江堂

元治年間(1864-1865) 請求記号 T1A0/71/52

それでは、なぜ『庭訓往来』は、長い間、また幅広い階層に支持されたのでしょうか。

今のところ説明されているのは、総合的な内容を含むものであったということです。読むこと・書くこと・綴ること、また、百科的知識や書札礼、社会生活上の礼儀・礼法、さらには、社会全体の有り様(さまざまな身分階層、職業、各々の生活など)……これらが分化せずに載せられているところに意味があったと考えられています。百科的知識には、穀物や果樹、さまざまな器物や工具類、各地の特産品、諸職人などが羅列されていますから、身分にかかわらず、誰が知っていてもよい内容でした。特に衣食に関する語彙が多い点や、「農・工・商」あるいは「百工・諸商・諸芸の者」に関する語彙が往来物史上初めて取り入れられた点で、生活本意の庶民的なものであったと言えるでしょう(『日本教科書大系』「往来編」3参照)。

このほかの理由として、作者と考えられていた玄恵法印に対する信仰とでもいうべきものがあつたのではないかと思います。玄恵は、『建武式目』の制定に関与し、『太平記』の作者の一人と目され、



ていしんおうらいずさん  
『庭訓往来図讃』井筒屋三右衛門 元禄12 (1699)  
請求記号 T1A0/71/68

狂言の大蔵流の祖と伝えられています。事実とは  
もかく、江戸時代にはそのまま信じられていま  
した。玄恵は碩学才叡の僧として崇められていた  
のです。玄恵の著作物であればとにかく有り難いも  
ので、学ぶ価値のあるものだという感覚があった  
のではないのでしょうか。

同時に、伝統的なものに対する規範意識も働い  
ていたのではないかと思います。江戸時代の  
人々が古いものを尊ぶ傾向は今よりもよほど強  
かったようです。古くから人々が伝えてきたもの  
はそれだけで価値がありました。先代も先々代も  
学んできたものは、本人の意向にかかわらず、学  
ばなければならないものでした。

さて、もう一度『庭訓往来』の語彙の提示の仕  
方に注目したいと思います。先述の弓矢の勝負は、  
次々と言葉を羅列していくものでした。『庭訓往  
来』の構造上の特色は「類別単語集団をはさんで二  
つに分割された手紙文の半分ずつを首尾の両端に  
すえ、つなぎ合わせるとまとまった一通の手紙文  
となる(石川松太郎『往来物の成立と展開』)と解説  
されていますが、この「類別単語集団」はいずれも  
単語の羅列です。単語の羅列を用いる往来物は、  
『庭訓往来』以外にも多数ありますが、この単語の  
羅列という形式自体に意味があったのではないか  
と思われれます。

そこで、この単語の羅列の伝統に目を向けてみ  
たいと思います。

『枕草子』の「もの尽くし」は有名ですが、『平家  
物語』などによく出てくる武具・馬具の詳細な描  
写、『太平記』などの戦闘参加者の氏名の羅列な  
どを思い出すと、どうも、意味内容を伝えるよ

りも、並べること自体に目的があったのではないか  
と考えたくなります。言葉の羅列を多用しているも  
のに、室町物語(御伽草子)の『鴉鷺合戦物語』があり  
ます。これを見ると、

烏に同心<sup>たれ</sup>誰々ぞ。先<sup>まづ</sup>、鴻<sup>こう</sup>の大和守、鷄<sup>ろうこく</sup>漏刻<sup>ろうこく</sup>  
博士<sup>きし</sup>、雉<sup>けうちやうかく</sup>左衛門尉、山鳥<sup>もくのしやう</sup>、山鳴<sup>みづく</sup>、鷄<sup>とび</sup>出羽法<sup>ほつ</sup>  
橋定覚<sup>けうぢやうかく</sup>、梟<sup>もく</sup>の木工允<sup>もくのしやう</sup>、木兔<sup>みみづく</sup>、むさぶび、日  
鷹<sup>かし</sup>、夜鷹<sup>かし</sup>、ちぶり、樗<sup>かし</sup>鳥、浦島があけてく  
やしき<sup>はこ</sup>筈鳥や、誰か吹くらん筒鳥の、声も  
けうとき<sup>ことあ</sup>特牛鳥、鷓<sup>う</sup>、鴉<sup>たう</sup>、田うすべ、鷓<sup>もず</sup>、  
時鳥、鷓<sup>つぐみ</sup>、しなへ、鴉<sup>てらつつき</sup>、ひえ鳥、椋鳥、  
番匠鳥、しめの判官盛国、しとゝにとりて  
は赤しとゝ、てうのかしら、みぞはしり、  
これらの勢を先として、……………

(岩波新古典文学大系『室町物語集』上)

と、まるで並べことを楽しんでいるかのよう  
です。古浄瑠璃や近松門左衛門以降の浄瑠璃でも、  
「 尽くし」、「 揃え」というくだりを設け  
て同じカテゴリーの言葉が並べられますし、そも  
そも「道行き」は道すがらの地名の羅列です。落語  
『黄金餅』では下谷から麻布までの町尽くしが展開  
されますが、これも見事な羅列です。

このように眺めてみると、軍記読みなどの「読  
み」、浄瑠璃などの「語り」、落語の「噺」など、声を発  
して表現するものと言葉の羅列とは相性がよいよう  
です。

黙読に偏り、意味内容を貪ることに終始する現代  
の我々の読書の仕方からはなかなか想像しにくい  
ですが、声に乗って並べられて耳に届く単語の連  
なりは、心地よい魅力的なものだったのではない  
でしょうか。この言葉の羅列の魅力もまた、『庭訓往  
来』の寿命を延ばした要因の一つだったのではない  
かと思われれます。

(たん・かずひろ 附属高等学校大泉校舎教諭)

## 平成16年度資料展示会・講演会報告

### 1. 資料展示会・講演会について

附属図書館では、平成16年10月28日から11月2日までの6日間、「教科書・双六からみた文明開化 - 新収明治初期教科書展」と題する資料展示会を1階閲覧室で開催しました。今回は今年度新たに図書館に受け入れた明治初期の教科書、当時の学校や社会の様子を描いた絵双六等58点を厳選して展示しました。明治初期の代表的教科書の一つである『小学読本』は、その基になったアメリカのウィルソンのリーダーやその翻訳書とともに展示しました。また語彙を扱った教科書の中には、新しい時代になって使われるようになった言葉が列挙されており、挿絵にも文明開化を感じさせるものがありました。双六では、単語図、九九図等の各種掛図をコマにした『小学校教授双六』、明治初期に東京にあった学校をコマにした『東京小学校教授双録』等を展示しました。小金井祭に合わせた開催でしたので、学生、教職員のほか多数の一般市民、高校生も来館し、明治初期の教科書やカラフルな双六に見入っていました。期間中の入場者は501名でした。

資料展示会に合わせて、10月28日には本学の橋本美保助教授による講演会「明治初期の子どもと学校」を3階AVホールで開催しました。鷲山学長はじめ92名の入場者があり盛会でした。講演は当時の教育政策、学校、教科書や子どもたちの状況、就学率アップのための施策などを図や写真を多用してわかりやすく解説したもので、市民を含む参加者から頗る好評でした。

### 2. アンケート結果から見た資料展示会

資料展示会に入場された方にアンケートをお願いし、206名(41.1%)の方から回答がありました。

「1.この展示会を何で知りましたか？」には「会場に来て」が101名(39.6%)、「ポスター、チラシ」が合わせて79名(31.0%)、「人から聞いて」

が33名(12.9%)、「看板」が22名(7.5%)、その他、「図書館のホームページ」、「市報」等の回答がありました。

「2.本学附属図書館に、往来物や双六のコレクションがあることを知っていましたか？」に対しては、「知っていた」68名、「知らなかった」138名でした。

「3.今回の展示の中で特に興味をひいたものは何ですか？」に対しては、教科書は ウィルソン氏第壹リードル独案内、小学読本、The first reader of the school and family series、教育女礼集、双六は 新双六淑女鑑、東京小学校教授双録、東海道上り列車鉄道寿語六、大日本物産双六の順でした。

「4.展示会全体の感想・ご希望」については、44名(69.9%)の方から何らかの感想等を書いていただきました。

「5.今後の展示会へのご希望」については、78名(37.9%)の方から何らかの希望等を書いていただきました。



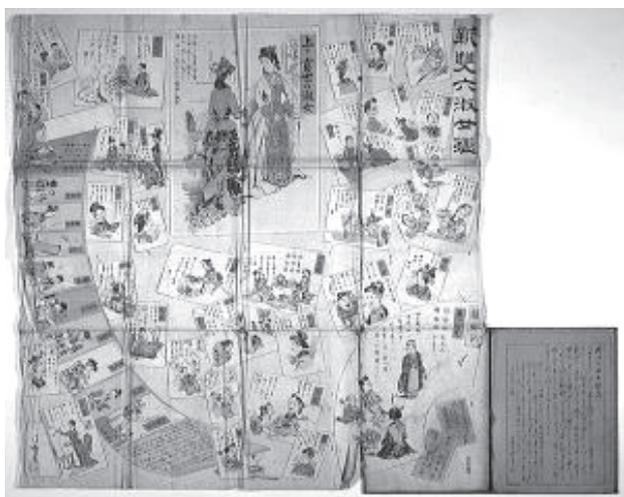
(展示会場風景)

「6.あなたのご所属」は、学内106名、学外96名という回答でした。学外の方のお住まいは、小金井市が19名、小金井市も含め多摩地区の方

が51名、都区内の方が7名、都外の方が35名、不明3名でした。学外の方の約7割が今回初めて来館されたとのこと。



『教育女禮集』牧金之助 明治28年(1895)  
請求記号 T1A2/35/Ma34



『新雙六淑女鑑』間野秀俊作 小林清親画  
山本松之助版 明治19年(1886)  
請求記号 Su83

### 3. 講演会概要

演題：明治初期の子どもと学校

講師：東京学芸大学教育学部・教育学講座  
学校教育分野 橋本美保助教授

日時：平成16年10月28日(木) 14:00～15:30

会場：東京学芸大学附属図書館3階AVホール

文部省は欧米の学校制度、とくにイギリス、ドイツ、アメリカ、オランダ等の教育法を研究し「学制」を起草した。学制の特徴は、第一に「国民皆学」を目指しているところにあり、第二に学区制をとったことにある。学区制は全国を8大学区に分け、1大学区を32の中学区に、1中学区を210の小学区に分けている。この通りにすると小学校は53,760校設置することになる。学校体系や教育行政については、フランスの教育法を翻訳して数字を日本の事情に合わせて作っている。小学校についてはアメリカに倣って作っている。そのため非常に外国色が濃いものであった。

教育の近代化のため外国の情報を、教育法規、専門学術書などの文献を通して入手していた。さらに専門教育の充実、人材育成のため、当時その学問の最先端の研究が行われていた国から教師を高給で雇い入れていた。

遅れていた初等教育の近代化については、マリオン・スコットを師範学校に雇い入れ、アメリカの教育方法・内容を導入し、教員養成制度を創設することによって進めた。

校舎については明治8年の統計によると、18%が明治以降の新築で、残りは寺院の一室や民家などに間借りをしていた。



(講演する橋本助教授)

#### (1) 文明開化の教育政策

「明治初期」とはいつまでか。明治元年以降、明治4年に文部省が設置され、明治5年に学制頒布、明治12年に学制が廃止され教育令が公布されたが、この間を教育史では明治初期とすることが多い。

#### (2) 授業はどう変わったか

私たちが抱いている明治の小学校のイメージは、明治後期に就学率が大幅に上昇してからのもの。明治初期は大きな机と椅子、教具は石筆と石盤、男女は別クラスであった。教授法は、

寺子屋で行われていた「個別指導」から掛図を先生が鞭で指しながら教える「一斉教授」へと変わった。教室に入るのも、机から石盤や書物を取り出すのも、号令のもとに行う「教場指令法」をアメリカに倣って作った。

カリキュラムはアメリカの小学校を模倣。教科書もアメリカのものを翻訳して作ったいわゆる翻訳教科書。代表的な例としてウィルソン・リーダーと小学読本の関係があげられる。

文部省が初めて作ったカリキュラムである小学教則は、自然科学を重視しており、小学校の全授業時間の40%を当てている。また、海外の知識あるいは権利や義務の概念、自由の概念というような市民道徳が説かれている。しかし程度が高すぎて一般の小学校で行えるものではなかった。普及していったのは、東京師範学校が作ったカリキュラムだといわれている。このカリキュラムの目玉は「読物」で、この教科は地理、歴史、修身、物理、化学といった内容のものを読ませるといった総合的内容教科となっていた。この読物とペアになっていて当時のカリキュラムとして非常に重要なものが、「問答」科であった。まず直観によって理解し、分かった上で概念化するというのが、ペスタロッチ主義の教授原則。暗唱や素読などの教授法を否定して、ペスタロッチ主義に基づく学校教育を、問答という教科でやろうとした。ところが現場の教師たちは、「問答」を禅問答のようなカテキズムであると誤解したために、問答科は教師と生徒が決められた問いと答えを繰り返すという形式的なものとなってしまった。このような授業では本来その教科で目指していたようなことがされていたかどうか、非常に疑問であるというのが明治初期の小学校の実態であった。

### (3)近代化の光と陰

どれくらいの子どもが学校に行ったのか。明治12年頃で平均40%位の就学率が、明治36年から38年頃には90%を超え95%位に達している。このような短期間で95%以上の就学率にした国はなく、いまでも非常に注目されている。ところが教育関係者の間では、実態を反映したものではなかったというのが通説となっている。就学率を上げるために行政機構が強烈な圧力をかけ、さまざまな就学督促を行った。これをさらに徹底させる



(講演会場の様子)

ため就学猶予・免除制度が導入されたが、これにより貧困家庭や障害児の教育権の問題が陰に留められ、弱い立場にある人の権利の保障が非常に遅れることに繋がった。

### (4)おわりに

新しい試みをしている学校、つまりオープンスクールや総合学習の先進校といわれるような教育の実践校を見学すると、寺子屋との共通点が多い。そこではじゅうたんを敷いて、座卓を用意し、子どもにべたん座りをさせている。先生が指示するように座卓を動かしてじゅうたんの上で個別学習している寺子屋的な光景をよく見る。しかも学年の壁を取り払いチーム・ティーチングの形で授業を行っていることがあるが、これも江戸時代多くの寺子屋で行われていた教授方法である。

こういう現在の実践や「学びの身体化」は、近代が取りこぼしてきた、非常に長い時間かかって培われてきていた文化的な学びの要素を、取り戻そうとしているように思われる。

(文責：学術情報部情報サービス課 増田晃一)

展示会および講演会の詳細は、  
 附属図書館ホームページ「展示会アーカイブ」  
[http://library.u-gakugei.ac.jp/lbhome/tenjikai/tenjikai\\_H16.html](http://library.u-gakugei.ac.jp/lbhome/tenjikai/tenjikai_H16.html)  
 でご覧いただけます。

## ECR：電子的授業支援サービス（試行） をご活用ください！

ECR( Electronic Course Reserves )：電子的授業支援サービス( 試行 )は、先生方が授業で指示する文献、課題、プリント、講義録、試験問題等の情報や本文を、附属図書館のサーバに登録(蓄積またはリンク)し、学生がインターネットで閲覧できる仕組みです。ぜひご活用ください！

アクセスURL <http://ecr.u-gakugei.ac.jp/> ( 附属図書館ホームページからアクセスできます )

### ECRのメリット



#### 先生方のメリット

- ・文献などの指示がいつでもどこでも効率的にできる
- ・資料の複製や配布を省力化できる
- ・受講生へのアナウンスが手軽にできる
- ・情報ごとに閲覧制限(パスワード)を設定できる

#### 学生のメリット

- ・授業で指示された情報がいつでもどこでも入手できる
- ・予習や復習に便利

### 利用申込・利用方法( 先生方 )

利用申込や詳しい利用方法は、ECR：電子的授業支援サービス( 試行 )のページから「サービス案内( 教員用 )」または、附属図書館ホームページの「お知らせ( <http://library.u-gakugei.ac.jp/notice/20040601.html> )」をご覧ください。



授業情報検索ページ

( ECR：電子的授業支援サービス( 試行 )のページ )

### お問合せ先

利用申込など.....情報管理課 電子情報係

TEL 042-329-7221

E-mail [libcat@u-gakugei.ac.jp](mailto:libcat@u-gakugei.ac.jp)

著作物の扱いなど...情報サービス課 参考調査係

TEL 042-329-7223

E-mail [libref@u-gakugei.ac.jp](mailto:libref@u-gakugei.ac.jp)

## 第17回国立大学図書館協会シンポジウム（東地区） を開催しました！

第17回国立大学図書館協会シンポジウム( 東地区 )を、平成16年12月7日(火)、8日(水)に附属図書館で開催しました。「法人化後の大学改革と大学図書館のあり方」をテーマに、基調講演や特別報告、事例報告等がなされました。

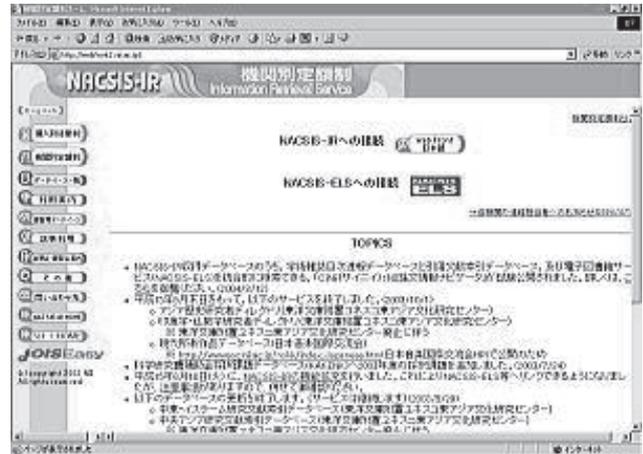


NACSIS-IR (機関別定額制) が利用できます！

附属図書館では、9月1日より国立情報学研究所が提供する情報検索サービスであるNACSIS-IR(機関別定額制)を導入しました！

NACSIS-IRでは、雑誌記事索引や科学研究費補助金研究成果概要データベース、学位論文索引データベースなど約40ものデータベースが利用でき、国内の広範囲な分野の文献情報等を調べることができます。

またNACSIS-IR(機関別定額制)の導入により、日本の学協会が発行する学術雑誌を収録する電子図書館サービスであるNACSIS-ELSの利用範囲も広がりました。ぜひご活用ください！



NACSIS-IR(機関別定額制)のページ

<http://webfront2.nii.ac.jp/>

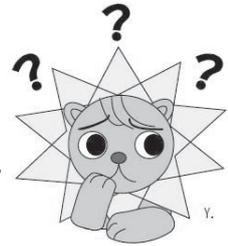
( 附属図書館ホームページからアクセスできます )

平成 16 年度附属図書館委員会名簿

所属	所属講座	氏名	職名	任期
図書館	図書館長	細江 文利	館長	16.4.1 ~ 18.3.31
総合教育科学系	教育学	君塚 仁彦	助教授	16.4.1 ~ 18.3.31
	特別支援科学	國分 充	教授	15.4.1 ~ 17.3.31
人文社会科学系	日本語・ 日本文学研究	大井田 義彰	助教授	16.4.1 ~ 18.3.31
	社会科学	都留 康子	助教授	15.4.1 ~ 17.3.31
自然科学系	広域自然科学	原田 和雄	助教授	16.4.1 ~ 18.3.31
	数学	溝口 紀子	助教授	15.4.1 ~ 17.3.31
芸術・スポーツ 科学系	美術・書道	石井 健	講師	16.4.1 ~ 18.3.31
	健康・スポーツ 科学	繁田 進	助教授	16.4.1 ~ 17.3.31
図書館学関係	教育学	山口 源治郎	教授	15.4.1 ~ 17.3.31
図書館	学術情報部	早瀬 均	部長	役職指定

## こんなとき、お待ちしております！ ～サービスカウンターの使い分け～

附属図書館1階には **貸出カウンター** と **レファレンスデスク** という2つのサービスカウンターがあります。どんな時にどのサービスカウンターを利用したらよいかを再確認して、みなさんの快適な図書館ライフに役立ててください。みなさんのお越しをお待ちしています!!



### 貸出カウンター

- ・附属図書館の図書や雑誌を借りたい
- ・借りた図書や雑誌を返したい
- ・図書の貸出予約をしたい
- ・書庫にある資料を利用したい
- ・書庫利用講習会に参加したい
- ・CDやビデオ、DVDを利用したい
- ・共同学習室を利用したい
- ・附属図書館に忘れ物をした!
- ・図書館利用証を再発行してほしい
- ・住所など連絡先が変更になった!

### レファレンスデスク

- ・資料の探し方を知りたい、探したい資料がうまく見つからない
- ・調べものの相談に乗ってほしい
- ・データベースの使い方を知りたい
- ・講習会について知りたい
- ・他大学図書館・機関を利用したい(紹介状がほしい)
- ・他大学図書館・機関から取り寄せた文献を受け取りたい
- ・貸出ノートパソコンを利用したい
- ・プリントアウトがうまくできない

## 資料ご寄贈のお願い

附属図書館では、蔵書の充実のために、皆様からの資料のご寄贈(図書・雑誌等)を随時募っています。皆様のご協力をお願いいたします。特に次の資料については、本学附属図書館において網羅的に収集することが求められている資料ですので、発生次第ご寄贈いただくと幸いです。

#### 特にご寄贈いただきたい資料

- ・本学関係者(教員・卒業生等)の著作物
- ・本学で刊行された紀要や研究報告書等

ご寄贈いただける場合には、直接図書館にお持ちくださるか、ご郵送ください。

なお、次の資料等については、受入ができません場合がありますので、ご了承ください。

#### 受入ができない資料

- ・附属図書館ですでに所蔵している資料
- ・附属図書館の蔵書構築方針に適合しない資料
- ・物量や形態などの点で、附属図書館での保存が困難な資料

お問合せ先：  
情報管理課 学術資料係  
TEL 042-329-7220  
E-mail libuke@u-gakugei.ac.jp

